



Title	中間言語話者のスタイル切り換え
Author(s)	寺尾, 綾
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58545
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【22】			
氏 名	寺 尾 綾		
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）		
学 位 記 番 号	第 2 4 2 9 2 号		
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻		
学 位 論 文 名	中間言語話者のスタイル切り換え		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 渋谷 勝己 (副査) 教 授 青木 直子 教 授 石井 正彦		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国語を母語とする3名の日本語学習者を対象として、教師と話す場面と、日本語非母語話者である親しい友人と話す場面の、ふたつの場面の談話におけるスタイル切り換えの実態をほぼ9ヶ月間にわたって縦断的に調査し、その切り換え能力の発達のプロセスを明らかにすることを試みたものである。導入部分としての第1部と、具体的な言語事象と言語行動事象を取り上げて切り換えの実態を詳細に分析し、切り換え能力の発達過程のモデル化を試みた第2部より構成される。本文153頁および資料2頁、400字詰原稿用紙に換算して約450枚の分量である。

第1部は2章よりなる。第1章は、バリエーションをめぐる先行研究を展望し、本研究の目的と立場を述べたところである。また第2章では、本研究が対象とした日本語学習者の属性とその学習環境、生活環境のほか、採用した調査の方法や以下の分析の方法などがまとめられている。

続く第2部は、中国語を母語とする日本語学習者3名を対象に、約9ヶ月間、5回にわたって行った縦断調査で得られた談話データを分析し、それぞれの時期における各学習者のスタイル切り換えの実態と縦断的な変化、スタイル切り換え能力の発達過程などを解明しようとしたところである。5章よりなる。まず第3章では、あいづちを取り上げて分析し、いずれの学習者も、(a) 友人よりも教師に対してあいづちを頻用すること、(b) 教師にはハイを多用するのに対して、友人に対しては「ウン」「アー」などさまざまな形式を用いること、(c) 縦断的な変化として、いずれの学習者も教師には「ハイ」「ソウデス」などの使用が増加するが、友人に対するあいづち形式には個人差が大きいこと、などを明らかにしている。続く第4章は学習者の使用するフィラーを分析したところで、ここでは、(a) 学習初期および友人に対して母音系フィラーが多用されること、(b) 指示詞系フィラーも学習初期から使用が見られるが、ここには母語の転移が推測されること、(c) 「ハイ・ウン」

などの、それ自身が待遇価をもつ応答詞系フィラーも早い時期から使用が見られるが、初期には対教師と対友人で切り換えが見られず、5回目の調査でようやく切り換えが認められるようになったこと、などが指摘される。一方、第5章で取り上げたデス・マス形式と非デス・マス形式については、全調査期間にわたってスタイル切り換えが十分に行われなかったとして、その切り換えを妨げている問題のありかが追究される。そしてその結果、チャンク的に使用される「チガウ」や、十分に習得がなされていない従属節に代わって使用される非デス・マス形、否定文で多用される非デス・マス形などが、その問題のありかであると述べられる。第6章では相互行為の観点から質問表現が分析され、(a) 質問という発話行為は、学習者間で個人差はあるものの、おおむね対教師場面では少なく、対友人場面で多く行われること、(b) 教師との会話では教師がインタビューー、学習者がインタビューーとなって隣接ペアが成立するケースが多いが、学習者同士で話す場合には相互に話題を導入することが多く、その際隣接ペアが完成しない場合も多いといったことが指摘されている。最後の第7章は、以上の分析結果を踏まえ、またその他のスタイル切り換えが見られなかった言語項目にも注目して、日本語学習者のスタイル切り換え能力をモデル化したところである。ここでは、(a) 学習者は習得初期の段階では、言語形式よりも、あいづちやフィラーの使用頻度などの言語行動的な特徴によってスタイル切り換えをマークすること、(b) あいづちやフィラーの形式によるスタイル切り換えは、デス・マス形、非デス・マス形などによるスタイル切り換えが始まる時期とほぼ重なること、(c) しかしその発達には学習者間で個人差があり、そこには生活環境や文法知識の習熟度の違いなどが関与すること、などを述べたあと、スタイル切り換え能力の発達モデルを提示し、最後に先行研究のなかでの本論文の位置づけと今後の課題を加えてまとめとしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者3名を対象として、これまで十分な研究の蓄積がなかったスタイル切り換え能力の発達過程について、縦断的に分析することを試みたものである。日本語学習者3名の、5つの習得段階における、教師を相手にした談話と親しい友人相手の談話の2種類の談話を比較して、切り換えにあずかる言語行動や言語項目、切り換えにあずからない言語行動や言語項目を幅広く整理し、(a) 学習者は、目標言語が十分に習得されていない初期の段階では、言語形式よりも、あいづちやフィラーの使用頻度といった言語行動的な特徴によってスタイルを切り換えていることをマークすること、(b) 形式面での明確なスタイル切り換えは、あいづちやフィラー、デス・マス形、非デス・マス形など、その機能の相違にかかわらず、いずれもほぼ同じ時期に始まること、(c) しかしその発達のプロセスには学習者間で違いがあり、生活環境や文法知識の習熟度の違いが関与すること、などを見出すことに成功している。学習者が切り換える項目を幅広く整理したことは今後のこの分野の研究にとって貴重な見取り図となる部分であり、またスタイル切り換え能力の発達過程としてモデル化したところも、今後参照されるべき大事な知見をもたらしていると言える。

ただし、問題点がないわけではない。たとえば、本論文では調査場面を設定するのに「わ

きまえ」といった要因を採用しているが、この概念は中間言語を研究するときにも妥当なものか、十分な検討を加えていない。スタイルはそもそも、談話の場で構築されるものといった側面も持っているはずである。また、各学習者が使用する言語形式の使用頻度が分析されるが、比較に必要な談話量の調整が十分に行われているとは言いがたい。その他、ベースラインとしての中国語母語話者のスタイル切り換えデータがない、分析した項目を選んだ理由が明記されていない、参考文献が最新のものではない、などの問題もある。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、日本語学習者のスタイル切り換えの実態を縦断的に詳細に記述し、その発達過程を一定程度明らかにした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。